

マニラの鼻

中村敦夫



マニラの鼻



中村敦夫

マニラの鼻 定価 一、二〇〇円（本体一、一六五円）

第一刷発行 一九八九年十月二十五日

著者 中村敦夫

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二

〒一一二

電話 東京（〇三）九四五―一一一

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

©中村敦夫 一九八九年

落丁本・乱丁本は小杜書籍製作部宛にお送りください。

送料小杜負担にてお取替えます。

なお、この本についてのお問い合わせは、
文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

Printed in Japan ISBN4-06-204599-0 (文二)

目次

プロローグ

8

第一日 ● 狙われた女

22

第二日 ● 大いなる嘘

78

第三日 ● 聖者は銃を取る

138

第四日 ● 雀部隊のリーダー

194

第五日 ● 花屋敷へ急げ！

252

第六日 ● 黒いキリスト

290

エピローグ

324

《主なる登場人物》

堂田将司——デューク機関・日本拠点員

ホセ・ミゲル——同・フィリピン拠点員

坂本勉——《世界報道》マニラ特派員

高原麗子——川丸商事マニラ支店長代理夫人

ユキ——その娘

リタ・モンテス——有名歌手、元ミス・ワールド

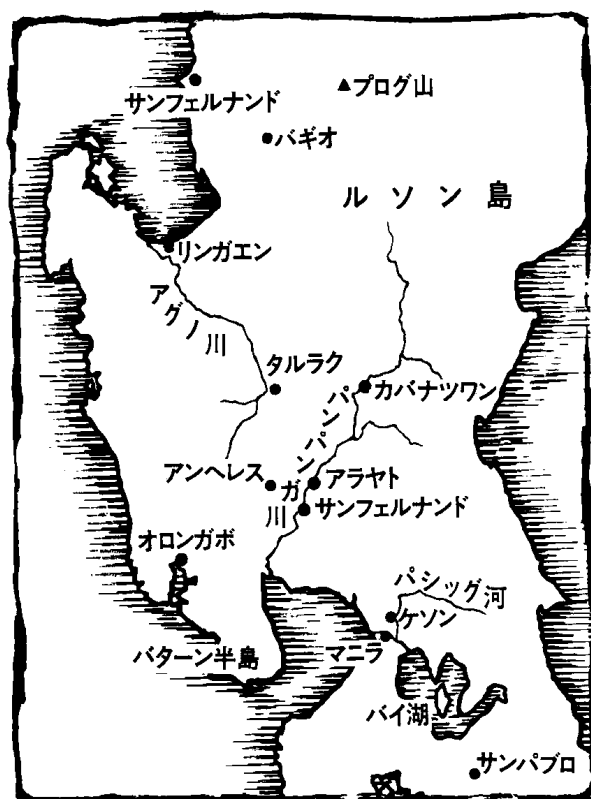
セベ——《ホビット》・ハウス・マネージャー

ペレス神父——解放の哲学を实践する聖職者

コンセプション——口髭の男、大学教授

ドナルド・グリーン——元米軍大将

エディ・ジャクソン——元CIA要員



ポール・ニコルソン——アメリカ大使館員

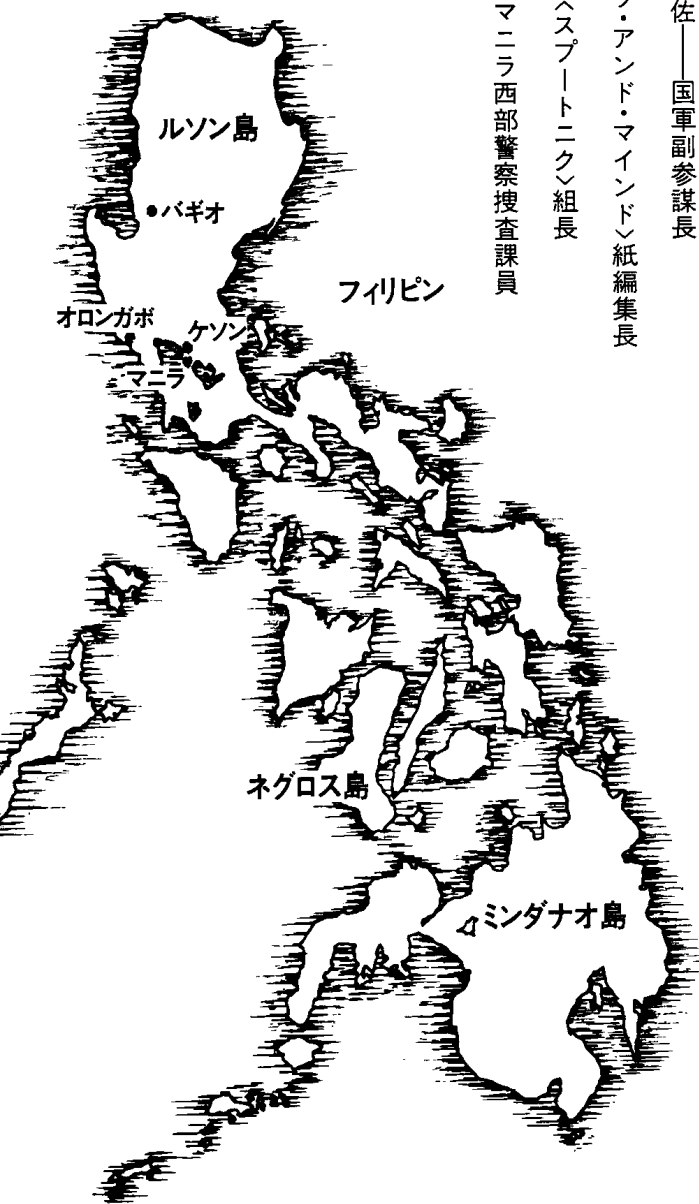
ピノ・メルチョール——マルコス時代の国防次官、タカ派のシンボル。

ゴンザレス陸軍中佐——国軍副参謀長

ヤップ——ヘハーツ・アンド・マインド紙編集長

ヘスス——暴力団ヘスプートニク組長

ガスパル警部——マニラ西部警察捜査課員



装画 西口司郎
装幀 岡村元夫

マ
ニ
ラ
の
鼻

プ
ロ
ロ
ー
グ

A

まるで、怪鳥の鳴き声だ。

ひくひくと痙攣する老婆の喉元。その奥底からしばらくり出される金切り声は、絶叫のようでもあり、呪文あるいは歌のようでもある。

「キー、キー、黄色のイロはーッ、紅い血だーッ！ ……ハハ、鼻アーにイ、キー、キーッ、気をつけろーッ！」

奇妙なメロデイーは、吹き矢となって空を渡り、夕陽を裂きながらマニラ湾に落ちた。

タガログ語（ルソン島マニラ周辺のことば）を解する地元の人間のみが、幾度か聞いているうちに、ようやく漠然とした意味をつかむことができた。

ここはマニラ市の北西、トンド地区の一面である。別名を『スモークイ・マウンテン』という。この一帯は、マニラ市民の廃棄物集積場、つまりゴミ捨て場である。

ゴミを燃やす煙や、メタンガス、風に舞い上がる塵や埃などが、絶えずこの地の中空をおおっている。『スモークイ・マウンテン』の異名は、比喻でも洒落でもなかった。

驚いたことに、この巨大なゴミ捨て場のあちこちに、数千の人びとが住みついている。

住宅と呼べるような代物は、もちろんない。古竹や木の棒を地面に差し込み、むしろや古絨毯、テントの端切れなどで屋根をはり、ブリキや木片で壁を作っただけのものである。台風でもこようなものなら、最初のひと吹きで、影も形もなくなってしまう。

人びとは裸で、あるいは拾った古着をひっかけ、靴もはずに歩き廻っている。仕事はといえば傷のついていないガラス瓶や、鉄屑を集めることである。そして腐りかけた新しい生ゴミから食物を選び分け、コーラのびんの底に残った液体をすすること、で、飢えと渴きを凌いでいる。

大人も子供も病人が多く、頭も顔も手足も、皮膚病に冒されて膿だらけの者すらいる。

外部から立ち入る人間は、その吐き気を誘う悪臭のなかで、五分とたたずむことはできないだろう。この地獄絵はおそらく、人間が人間に与えることのできる最悪のプレゼントの一つに違いない。『貧困』という文字さえあざ笑うこの極限状態は、二十年間のマルコス支配の遺産であるが、アキノ大統領の代になっても、なにひとつ変わってはいない。

日本人がこの場に立つならば、どんな思想の持ち主であれ、一つの単純な疑問を持たざるを得ない。

「あれは、いったいどこへ消えてゆくのだろう？」

毎年のことのようにつきこまれる、日本政府の膨大な援助金、ODAのゆくえである。

さて、老婆の方に話をもどそう。

ひからびた糸のような毛の髪は、夕陽の当たり具合によって、白色にも灰色にも、時には金や銀にも光って見える。

顔は赤銅色の皺の渦。そのなかに埋め込まれた二つの目玉は、千年先を見透すような鋭い輝きを放っている。

痩せこけた身にボロをまとい、首からは、貝殻や木の実のネックレス、十字架のついたロザリオなどを、腰が曲がるほど幾重にもぶら下げている。

黒いかさぶたにおおわれた足が、ゴミを踏みつけながらせつせと動く。肺に穴でもあいたような苦しげな呼吸。しばらく歩いては立ち止まる。流れつ放しのよだれを、垢にまみれた手の甲で拭く。そして再び、甲高い声で例の呪文をわめきたてる。

老婆には常に数十人の群衆がついて廻る。おかたは地元の老若男女だが、たまには、新聞記者やテレビのレポーターが混っていることもある。

老婆はある意味の有名人である。

名をノラという。たいていの人びとは、『ノラ婆ア』と呼んでいるが、その呼びかたは、親近感とともに、一種の畏敬の念をふくんでいる。

ノラ婆アは、一種の巫女であり、予言者でもある。長い間、スモーキィ・マウンテンの司祭的な役割を果たしてきた。

フィリピンはカトリック教国といわれ、八十五パーセントの人びとが信者である。しかし、欧米型のオーソドックスな信仰を持つ者は、ごく少数のエリート階級に限られている。

大多數の庶民に根づいているのは、土着の原始宗教とカトリシズムが混じりあった混血宗教である。人びとは、気ままにさまざまな偶像を作りあげ、それぞれの儀式を慣行としている。それは、信仰と呼ぶより、信心と言ひ換えた方が適切である。

ノラ婆アは、普段はひっそりとゴミの山にうずもれているただの生活者である。だが時どき、サントニーニョ（幼いキリスト）の魂がのり移り、トランス状態に落ち入る。そうした状態は、一週間ほど続くのが通例である。

キリストの御託宣が、ノラ婆アの肉体に入ると、タガログ語に翻訳され、スモーキィ・マウンテンにこだまするのである。

マルコス一派の圧政当時、ノラ婆アは数度にわたって逮捕された。マルコスとその妻イメルダを、サタン（悪魔）の召使いであると、わめき続けたからである。

ノラ婆アは苛酷な拷問にも決してめげることがなかったという。血だるまになって横たわる老婆――その留置所の鉄格子のなかへ、ある晩、光の玉が入り、後光（ごこう）となってノラ婆アの頭上に輝いた。警察は仰天し、彼女を釈放せざるを得なかったという話がある。

ノラ婆アにまつわるそうした逸話や伝説は、枚挙（まいきょ）にいとまがない。

彼女の名を全国に轟かせることになったのは、アキノ新大統領登場の予言である。

コラソン・アキノが、まだ候補にすらあがっていない段階で、ノラ婆アはこう叫び続けたのである。

「サタンの夫婦は去る！ 黄色い布を揚げよ、旗を振れ、新しい女王がやってくる！」

ノラ婆アは、四月中旬の復活祭に向かう『聖なる週間（ホーリー・ウィーク）』を前に、再びトランス状態に入っていた。

噂好きのマニラっ子たちは、当たり屋予言者の意味するところを、さまざまに解釈してゴシップをとばしている。

「黄色は、紅い血。鼻に気をつけろ！」

コラソン・アキノ大統領の命が危ないという点では、衆目の意見は一致している。分かれるのは、誰が大統領を狙っているかという解釈である。

対決ムードを強めている新人民軍（NPA）ゲリラであるという者、右翼軍人だと断定する者、アメリカである、いやソ連である、日本赤軍である、等々とキリがない。

「鼻に氣をつけろ！」

という脈絡については、誰もがタオルを投げた。

「大統領が風邪をひくのさ」

とか、

「整形手術に失敗するかもしれん」

といった程度のヨタで、オチがつくのがせいぜいである。

B

波間に太陽が沈むと、たそがれのなかで黒いシルエットを映していた船の姿が消えた。代わりに、ナボタス港のあちこちに、ポツリポツリと灯がともし始めた。

古い船着き場のこちら側は、軒並み空屋になった倉庫地区、その周囲はスツポリ薄闇につつまれてしまった。

廃屋の屋根の下で、四本の煙草の火だけが、不規則なリズムで上下に揺れている。

足音が聞こえた。

「来たか……」

ガスパル警部が低く呟いて、吸いかけのアルハンブラを水溜まりに落した。他の三人の警官も、それがまるで儀式でもあるかのように、揃って煙草を捨てた。三人とも、柄ものの半袖シャツに無地のズボンという私服である。

木造バラックの倉庫の角から、一つの影が現われた。

近づくにつれ輪郭がはっきりしてくる。不精髭をはやした貧相な男だった。

ナボタス港は、マニラ市の北隣りにある。昔から、フィリピン最大の漁港として栄えてきた。十七、八年前から、この地区に大変化が起きた。

アジア開発銀行の勧告で、港湾の近代化が進められたからである。二千五百万ドルの借款が供与され、日本の建設会社が漁港を新設した。御多分にもれず、マルコス一族や事業関係者が、たつぷりと黄金色の蜜を吸った。

結局、地元住民千五百家族が立ち退きを迫られた。また作業が機械化されたため、漁師や荷揚げ人夫などの多くが失業した。地元の小さな漁業会社は、外資系の会社にならなくなり吸収合併された。操業会社の七十パーセント以上は、日本を筆頭とする外国企業である。

従来のやりかたを続けた零細漁民は、ことごとく破滅に追い込まれた。日本の巨大なトロール船で、海底の石ころまですくわれ、獲物がなくなってしまったのである。おまけに近海は、すっかり汚染されてしまった。

この土地の人間は、日本製の缶詰を買う以外、魚を食うチャンスさえ失なった。

住民にとって、悪いことはさらに重なった。日本の海外経済協力基金（OECF）により、海岸ぞいにマルコス・ハイウェイを建設することになったのである。

長い間、海とともに暮らしてきた住民に強制退去が命じられた。何の補償もなしにである。抵抗する地区には、不審な火事が何度も起こり、数十人の焼死者が出た。

これらの反対運動のリーダーたちは、脅迫され、連行され、拷問を受け、最悪の場合には虐殺され

た。

地元の庶民にとって、得なことは何もなかった。もたらされたものは、住居地の喪失と失業、そして飢えだけである。

奇妙な話だが、海外援助による開発というものは、それが野であれ海であれ、ほとんどがこうした現象をもたらす。

日本政府の膨大な援助金は、もとはといえば、国民の税金である。その何割かは、両国の権力者たちがりべートとして分け合い、利益は企業が独占する。どれだけ開発に金が使われようと、その国の人びとからは、反感しか得られないというのが実情なのだ。

「どうした？ 金は持ってきたんだろうな」

フィリピン人にしては、かなり体格のいいガスパル警部がいった。三十代半ば、眉毛が濃く、はつきりした二重^{ふたえまがた}瞼の美男子である。

「ああ、いつもの通りだよ」

不精髭の男が答えた。男は、ダブダブのズボンの尻ポケットから、ゴム輪で巻いたペソの札束を取り出した。

五百ペソから五ペソまで六種類の紙幣が、ゴチャマゼに束^{たば}ねてある。

「いくらある？」

「二千ペソだよ」

ガスパル警部は、警官の一人に顎で合図をした。警官は、札束を取り上げ、一枚一枚ていねいにかぞえ始めた。ほかの二人も、額を確認するかのように、仲間の指先を見つめた。